九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

直接指示論は指標詞を説明するか？

樋口，えり子

https://doi.org/10.15017/1430732

出版情報：哲学論文集. 30, pp.77-91, 1994-09-30. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

直接指示論は指標詞を説明するか？

樋口　えり子

本論で問題にするのは、「私」「今」「ここ」等の、所謂「指標詞（indexicals）」と呼ばれる一群の表現である。フレーゲは「思想（Der Gedanke）」という論文で、「私」「今」「ここ」等の表現について断片的なサジェッションを与えたのみで、包括的な議論を与えてはいない。これらの表現はフレーゲはきわめて不十分な形でしか取り扱わなかったにも関わらず、自己をある言語空間の中に位置付ける自己定位的役割を担い、誰もが必ず使う、自然言語において不可欠の表現である。これらの語が何を指すか決定する為には、その語を含む文がどのような状況で述べられているか、ということを必ず参照しなければならない。例えば、本稿で言う「私」が指すものと、他の論文で言う「私」が指すものとでは指示対象が異なってくる。つまり「私」という全く同一の語が、異なる文脈によっては無数の異なった指示対象を持つことになるのである。このような性質は「文脈依存性」[1]と呼ばれる。この「文脈依存性」は、指標詞の最大の特徴である。[2]しかしながらこの文脈依存性という特徴はフレーゲの意味論に果たして収まるのかという問題が、現代の言語哲学において頻繁に問われている。[3]

近年所謂「直接指示理論（direct reference theory）」を支持する一群の哲学者が、このような文脈依存性の意味論的分析

について生じる問題を一つのモティベーションとして、反フレーゲ主義的議論を展開している。この小論は、この直接指示論者による指標詞の分析によっては説明できない状況があることを示し、又そのような状況が直接指示論のどこが問題で生じるのか検討することを目的とする。直接指示論を採用するか否かという問題は、それについて真偽が問題となるところの文の命題がどのように構成されるか、という問題についての根本的問いかけであり、ひいては信念や知識の問題等とも広く通底するものであるので、正確な解釈が要求されるものである。この問題を巡る議論を検討することによって、最終的には指標詞を考える際採るべき方向性を考えてみたい。

一　予備的考察

直接指示論者が主張するのは、次の基本テーゼである。

D　文の構成要素である対象指示語は、その意味内容としての何らかの概念要素を介さずに直接対象を指示する(4)

このテーゼは、従来の伝統的意味論の枠組みとみなされてきた、フレーゲ意味論の一つの解釈に基づくフレーゲ主義(Fregean)へのアンチテーゼである。対象指示語は何らかの概念要素を介して対象を指示するというフレーゲ主義が冒頭に述べた文脈依存性という自然言語の特質に直面したときに破綻をきたすことを示すことで、直接指示論者は自説の正当性を主張しようとした。だが、対象を直接命題の構成要素として認めることは、フレーゲにおいては認められていた対象指示の際の何らかの認識論的枠組みを解除することでもある。そのような枠組みは果たして指標詞においても除去可能であるか、という問題が、ここでの主眼である。実は彼らがフレーゲを批判する際そのフレーゲ像に一種の予断があり、その中で見落とされたが故に直接指示論の議論の弱点となる部分があるのではないだろうか。このことをみきわめる為に、まず（おそらくは実際のフレーゲの見解とは違い、単純化された）直接指示論者の攻撃の対象となる「フレーゲ主義（Fregean）」の像が如何にして

確定されたか、そしてその像がどのようにして指標詞を含む文において破綻をきたすのかという経緯を確認しておく必要がある。[5]

周知のように、フレーゲは文や記号といった言語表現の意味論的要素として、言語表現が表示する Bedeutung に加えて Sinn という概念を導入した。[6] これはきわめてコントロバーシャルな概念であるが、これが "Über Sinn und Bedeutung" で同一性命題の認識価値の相違についての議論から導入されていることから、一般に次のような定式化が可能である。

SとS'が認識価値の点で異なるなら、SとS'は異なる Sinn を持つ[7]

Sinn 概念の持つ不明瞭さはこの「認識価値」という曖昧な語に由来しているのであるが、直接指示論者は、この不明確な用語が指すものは「記述かそれに類するもの」[8]であるという前提に立っている。次に Sinn は、そこで表示されるものが与えられる方法（die Art des Gegebenseins des Bezeichneten ）を含むものとして規定される。この「認識価値」と「与えられ方」という二つの要請から、直接指示論者は次のような Sinn 像をその雛型として導く。

① Sinn は、記述かそれに類するものが表すものである

② Sinn は Bedeutung を一意的に決定する（逆は成り立たない）

又、文全体の Sinn として導入される「思想（Gedanke ）」概念は、次のように特徴づけられる。

③SとS'が理解される時、Sが受け入れられかつS'が受け入れられないなら、S'とSは異なる Sinn を持つ[9]

さて、フレーゲによればそもそも文という単位に意味論的考察の際の出発点としてのプライオリティーが与えられているので、個々の語はまず文全体への寄与として考えられねばならない。Sinn についてもそれは同様である。しかしこのように文の構成要素の Sinn が文の思想に貢献するということはどういうことであろうか。この部分の直示論者の解釈は

④ Sinn のみが思想の部分となることができる[10]

というものである。

以上見てきた特徴づけは、解釈としての問題を含むものでありながらも、以下に見る直接指示論者によるフレーゲ批判の論拠となるものである。よって次に、どのように直接指示論者がこれらの解釈を前提として「フレーゲ主義」と呼ばれる見解を批判し、テーゼDを導いているのか、本題の指標詞の問題に即して見てみよう。

II Fregean vs. Russellian

先にも述べたように、直接指示論者の主張は、フレーゲが考えたように対象指示語が何らかの有意味性を持っているのは、それが何らかの概念的なものを介して対象を決定している(Fregean)からではなく、そもそも指示が対象に届いているかぎりにおいてのことである(Russellian)というものであった。何故少なくとも文脈依存性が問題となる場面で、Fregeanを廃してRussellianとなる必要があると彼らが考えたのか。以下はその概略である。

上記の②で措定されている「Sinnが Bedeutungを決定する」という関係を指標詞を含む文に適用すると、ある問題が生じてくるように思われる。例えば「今日は晴れている」という文は、8月1日に発話された時には真であっても、次の日の8月2日に発話されれば偽となるかもしれない。もしこの二つの「今日」が同じSinnを持つならば、この二日間で発話された文は両方同じSinnを持つこととなり、従って同じ真理値を導くことになってしまう。しかしこれは明らかな誤りである。フレーゲはこの問題に対して、次のような簡単な処方を与えている。それは、

「今日」という語を用いて昨日表現したのと同じことを述べようと思うなら、この語　を「昨日」によって置き換えねばならない。発話の時の違いによるSinnの変化を元に戻す為に言語表現は異なっていなければならない。[11]

というものである。この処方は、直接指示論者によれば、先のフレーゲのSinn概念と整合するものではない。第一、Sinnが日毎に変化するということは妙なことである。フレーゲのSinnはそもそもある認識論的契機として導入されたものであり、

従って我々の言語理解と相関的なものであるはずである。日々変化するSinnという考えは、このようなSinn概念の要請に反するように思われる。指標詞が持つ冒頭にも述べたこのような文脈依存性の問題は、このフレーゲの言明のみでは一見何ら解消されるようには思われない、と直接指示論者は論じる。

J・ペリーは、このように指標詞はそれ独自では指示対象を一意的に決定しかつフレーゲの要請と整合するようなSinnは持ち得ないのではないかという論点から、フレーゲ批判を展開している。[12] 先の①のようにSinnを記述かそれに類するものが表すものとするならば、ペリーの批判を待つまでもなく、刻々と変わる状況に対応して様々な対象を指示せざるを得ない語に対しその時々の対象を各々一意的に指定し、かつ全てのトークンに共通するような記述を探すことは困難である。確かに、我々が「今日」という語に関して直観的に承認していることは、それはその語を含む文が発話された当日を指すといった一種の規則である。それは実際我々に「今日」の全てのトークンに共通する一種の意味了解を与えている。しかしこのような規則も、異なる状況に於いて異なる対象を導くことになるので、それのみでは対象を一意的に指定するという要請を課せられているフレーゲのSinn概念と整合するものではない。次にこのような全てのトークンに共通する規則によって導かれる「今日」の指示対象が、この指標詞の意味内容であるとしてみよう。つまり1994年8月1日に発話された「今日は晴れている」という文中の「今日」が持つ情報内容を、このような意味的規則によって導かれた「1994年8月1日」という対象と「（　）は晴れている」の不完全なSinnとのセットと等しいと考えるのである。ペリーはこれを「情報的に等しい思想（informationally equivalent thought）」と呼ぶ。しかしこのようにSinnを介さずに対象が直接文のSinnの部分として参与することは、先の④のSinnのみがSinnの部分となり得るというフレーゲのSinn概念に反することである。又そのようなことが許されるならば、例えば1994年8月1日の「今日は晴れている」という文のSinnと「1994年8月1日は晴れている」という文のSinnは等しいことになる。しかし前者に同意しても、「今日」が1994年8月1日だということを知らずに後者を否定することもあるかもしれない。この場合は両者の持つ認識論的差異はなくなってしまうことになるので、

フレーゲの意味論の枠内では、対象を直接命題の構成要素とすることも許されない。

このようにSinnを記述と考えると指標詞の文脈依存性を説明することができず、意味的規則や指示対象と考えたらフレーゲ的意味論の枠内で説明できない。こうして考え得る方策は全てフレーゲ意味論の枠内では失敗に終わってしまうとペリーは結論づけたのである。ペリーのフレーゲ批判は、専ら④のSinnのみが思想の構成要素になり得るという部分に関わっている。この要請を解除して先の指標詞が何らかの概念要素を介さずに直接対象を指示し、それを思想の構成要素として認めるならば、問題は解決するとペリーは考えた。そうすると、先の「情報的に等しい思想」が、それについて真偽が問い得るところの思想の資格を得ることになる。よく晴れた8月1日に「今日は晴れている」と言う場合と、昨日とうってかわって大雨に見舞われた2日に(おそらくは一日中部屋の中にいて屋外の状況について全く知らずに)「今日は晴れている」と言う場合、各々の指標詞の指している対象を導く規則(ペリーはこれを「役割(role)」と呼んでいる)は同じでも、それによって各々1日と2日という異なる対象が与えられるので、結果として異なる命題(思想)が導出されることになる。これは「今日」だけでなく他の指標詞についてもあてはまる。例えばAとBが同時に「熊が私を襲おうとしている」と思う。「私」には発話者をさすという規則(役割)があり、AもBも各々「私」で自分を指すので、両者は異なる「思想」を持つことになる。しかしその意味は共通している。両者とも「熊が自分を襲おうとしている」と思うので、同じように死んだふりをするのである。この場合、両者に共通の意味が共通の振る舞いを引き起こしたのであるが、その意味は各々の思想を導く規則(役割)によって与えられたのである。このようにして、ペリーは④の制約を解除してSinnのような媒介物なしに直接語が対象を指示する単称命題を基本に考えれば、先の文脈依存性に関する問題は解消する、と考えた。つまり、指示的表現の有意味性を記述等の何らかの概念要素に求めるフレーゲ主義(Fregean)から、そのようなものを介さず直接対象に求めるラッセル主義(Russellian)への転向の重要性を主張したのである。

三　直接指示論は指標詞を説明するか？

直接指示論者は、以上のように、指標詞を含む文の思想からフレーゲのSinn概念を排除し、「私」「今」「ここ」という語が、それを含む文の表す命題の中では、各々発話者、発話時点、発話地点に相応する事物を表すと考えた。このアイデアは、あくまで語と対象が如何に関わるか、という点に考察を限定する意味論においては、文脈依存性の問題を解消するのに非常に有効に働く。しかしながら、このようにフレーゲによって要請されていた認識論的枠組みを解除することで、次の二つの問題点が出てくる。第一に、意味を直接対象に求めるならば、指示対象を同じくする他の表現との認識論的差異が説明できなくなる。次のような例を考えてみよう。ある時、東京から福岡にやってきたA氏が「ここは都会だ」と言う。彼は実は（一時的な記憶喪失か何かで）自分がいるところが福岡であることを知らず、かつ九州にある都市は全て田舎であるという信念を持っていたとする。彼はこのような場合、「ここは都会だ」に同意しても、「ここ」という指標詞をその指示対象である「福岡」で置換した文「福岡は都会だ」には同意しないだろう。この時A氏にとって「ここ」は、「福岡」や「（１９９４年の時点で）海浜にドーム球場がある日本で唯一の都市」等の指示対象を同じくする他の表現で置換されることはできない。だが指示対象が直接命題の構成要素とならねばならない直接指示論の枠組みでは、これらの文は情報的に等しいものとなる。直接指示論者はフレーゲのSinn概念を排除することによって、指標詞から認識価値を排除した。しかしフレーゲがSinn概念を導入したのは、他ならぬこの同一の指示対象を持つ語の置換不可能性を説明する為ではなかったのか。この置換不可能性は、単に文の意味の構成要素を指示対象に求めるのみでは説明されない。このような指標詞の認識論的な側面を考慮に入れて初めて、我々は指標詞の使用場面における言語と認識の関わり方を明らかにすることができるだろう。ある理論が指標詞を説明すると言える為には、まずこの関わり方が説明できねばならない。直接指示論は、これに対して満足のいく説明が果たして与えられるのか、という問題が第一の問題である。

この指標詞の他の語による置換不可能性は、勿論ペリーも気付いていた。彼は、次のような例を用いてこの置換不可能性を検討している。[13] 私がある日スーパーに買物に行き、買物篭を手押し車に乗せて押していたら、妙なことに気が付く。誰かの持っている砂糖の袋が破けているようで、一筋の砂糖がその人の通ったであろう道筋に沿ってこぼれているのだ。私はその破けた砂糖の袋を持っている人を探して注意してやろうと思い、その砂糖の跡を追い掛ける。砂糖を追ってスーパーの中をぐるぐる回っているうちに、私は思いがけないことに気付く。実はその破れた砂糖の袋を持って歩き回っていたのは私であり、私は自分がこぼした砂糖の跡をたどってスーパーの中をぐるぐる回っていたのだ。この時、私は「破れた砂糖の袋を持っている人は、スーパーを汚している」という信念を「私はスーパーを汚している」という信念に替えたことになる。「私」とは「破れた砂糖の袋を持った人」であり、この場合同一人物を指している。しかしここでは明らかな信念内容の変換がある。それは他ならぬこの「私」という語の他の語による置換不可能性によるものである。ペリーによれば、この置換不可能性は「私」が本質的に指標的（essentially indexical）な語であることによって生じる。「本質的」とは、「私」が他の如何なる語とも置換できないという意味である。ここでいう「私」がその文脈の中で樋口えり子を指しているとしても、「私はスーパーを汚している」が「樋口えり子はスーパーを汚している」と置換できる為には、「私は樋口えり子である」を知っておらねばならず、再びそこで非説明項である筈の指標詞が表れてくる。このようにどのような置換によっても指標詞を消去することができないということは、指標詞を考える際、非常に重要である。我々は一の①で、SとS'が認識価値の点で異なるならそれらは異なるSinnを持つことを確認した。これに従えば、「私はスーパーを汚している」は、「私」を指示対象を同じくする他の表現で置き換えた文とは異なるSinnを持っている。（このことにはペリーも異義は唱えないだろう。）しかし、ペリーによれば「Sinnとは記述かそれに類するもので表されるもの」であった。「私」は他の如何なる表現とも置換できないから、当然Sinnを表す「記述かそれに類する概念要素」は存在し得ない。ペリーは先に論じた指標詞の指示対象を決定する際の文脈依存性の問題に加えて、この置換不可能性の問題からも、Sinnを表す概念要素の不必要性の結論を引き出した。しかし、

指標詞が他の表現で置換できないということは、それが他とは異なる対象の与え方をするということである。このように、記述が表すSinnを与えることができないということから、Sinnがないという結論を引き出すことは飛躍である。むしろ①のような先の直接指示論者によるSinnの定義に問題があるのではないか、ということこそ検討せねばならないことであるように思われる。[14]

指標詞にSinnを認めないことにより、第二に、小説のような指標詞の虚構的使用法を説明できなくなる。我々は、小説の中で実際は存在しない登場人物が「私」と語り、「今」「ここ」という、現実世界では決して指示対象を持たない語を使用することが許容されていることを知っている。これは指示対象を持たないゆえに指標詞の用法として不適切だとしてしりぞけられるどころか、却って豊かな創造的世界を生み出すものとして歓迎されすらする。小説の登場人物が「私」と語り、「今」「ここ」と発語することで、小説という世界に一つの視座が導入される。それによってあたかも認識主体が存在するかのような振る舞いが成立するのであるが、このような指標詞の虚構的使用法を、命題の有意味性を対象に求める直接指示論の枠組みで果たして説明できるのか、ということが次の問題である。明らかに指示対象が存在しない場合、指標詞の有意味性を対象に求めることは不可能である。だが現にこのような場合でも我々は指標詞を理解することができる。このように、指標詞の虚構的使用が可能であることは、逆に指標詞がそれ自体で何らかの認識価値を持つことを示しているように思われるのである。

このように、直接指示論の枠組みでは、指標詞の他の表現による置換不可能性、指示対象を欠く場合の指標詞の有意味性の二つを説明しようとする際にその弱点が露呈する。よって、より十全な指標詞についての理論を求めようとするなら、直接指示論者が批判の対象としたSinn概念を再度検討する必要がある。

四　問題解決の方向

直接指示論者が批判の対象として措定したフレーゲ主義は、先に見たように、Sinn を一意的に対象を導く何らかの記述ないしそれに類するものが表すものであるとした。このようなフレーゲ解釈は、(おそらくフレーゲのある部分に捕われすぎるあまり)柔軟性を欠く硬直したものであるし、実際に何人かの哲学者の批判の的となっている。フレーゲが無造作に

「今日」という語を用いて昨日表現下のと同じことを述べようと思うなら、この語を「昨日」によって置き換えねばならない。発話の時の違いによる Sinn の変化を元に戻す為に言語表現は異なっていなければならない。

と記した時の、発話の時(あるいは場所、人――フレーゲは、これと同様のことがは「ここ」「そこ」についても言え、又「私」という語を含む同じ発話も異なる人々によってなされれば異なる思想を表す、と述べている)。[15] が違えば Sinn が変化する場合もあるという洞察は、むしろそのような硬直した Sinn 概念に納まらない、Sinn の可能性を示唆するものであるように思われる。しかし繰り返すが、ここではフレーゲが実際にどのように指標詞の Sinn を考えていたかという、所謂フレーゲ解釈は行なわない。あくまで、実際の使用場面を考えてその性質を検討し、直接指示論が十分に扱うことができない認識論的側面を考察することがここでの目的である。フレーゲの Sinn 解釈はそれ自体で大きな問題であるので、ここでそれを全面的に検討することは不可能であるが、指標詞に Sinn を認めるとするならば、どのような方向でフレーゲを解釈することが可能であるか、ということについて、簡単な検討を行ないたい。

まず、「思想」に記されているフレーゲの指標詞に関する議論を以下に順を追って見てみよう。[16]

A　思想の正しい把握の為には、その文がいつ発話されたかを知らねばならない。この場合、発話の時が思想表現の部分である。

B　「今日」という語を用いて昨日表現したのと同じことを述べようと思うなら、この語を「昨日」によって置き換えねばならない。発話の時の違いによる Sinn の変化を元に戻す為に、言語表現は異なっていなければならない。

C　Bは「ここ」「そこ」についてもあてはまる。

D　（これらの場合）文字によって保存できるような単なる発語は、思想の完全な表現ではない。思想を正しく把握する為には、発話に伴う状況についての知識が必要だが、こうした状況は思想表現の手段として用いられる。

E　「私」という語を含む同じ発話も、異なる人々の口をついてなされる時には、異なる想を表現する。そのうちの幾つかは真で、幾つかは偽であろう。

F　汎る人間は、自分自身に対し、他の如何なる人間に対するのとも異なった、特殊な原初的仕方で振舞う。今、誰かが自分は怪我をしたと考えるならば、彼はその際おそらく自分自身に対して振舞うこの原初的な方法を根拠に置くだろう。そのような仕方で確定された思想は、一人彼のみが把握できる。

G　しかし「私」を含む発話においては、「私」は「この瞬間にあなたに話しかけている者」といった、他人にも把握できるようないみに用いねばならない。そうすることによって、その発話に伴う諸状況を、思想を表すのに役立たせることができる。

A、B、Cから、我々が世界の中にあって世界に対して向かい会う際の視座が、時間や場所に従い変化すること、又その視座の変化に伴い思想も異なることを、フレーゲは正当に認識していたことがわかる。8月1日に言った「今日は晴れている」が表すのと同じ思想を次の8月2日に表す為に「昨日は晴れていた」というように言語表現を変えねばならないのは、丁度動いている対象を自分の視野の中で一定に保とうとするには自分も対象の動きに合わせて動いていなければならないのと同じである。[17] エバンズも指摘するように、8月1日という対象を考える仕方（the way of thinking of an object）は、それを追い掛ける仕方（a way of keeping track of an object）でもある。日にちの経過に従い、8月1日という対象に対する視座は変化する。この場合、発話者と対象は時間的に隔たっていく為、同じような仕方で8月1日を捉える為には、一日経ち、二日経ちするに従って、「今日」「昨日」「一昨日」と言語表現を変え、発話者の位置する時点と8月1日という対象

との時間的隔たりを示さねばならない。同様のことは、「ここ」「そこ」「あそこ」等についても言える。これらは、発話者の視座の空間内での移動に従って生じた空間的隔たりを表すのに用いられる。このように、フレーゲは「今日」「昨日」、あるいは「ここ」「そこ」等の指標詞に、動的で文脈可感的なSinnを考えていたと言える。つまり、発話の時や場所等の状況に関わらず、不変であるようなSinnの他に、その決定の為には発話状況に依存するようなSinnも認めていたと考えられる。

しかし、いくら指標詞のSinnは文脈可感的であるはずだといったところで、そのようなSinnは、フレーゲの枠組みでは説明できないということが、直接指示論の論点であった。Sinnを記述ないしそれに類するものが表すものとする限り、そのようなSinnを考えることができないのは、先の議論からも明らかである。指標詞を含む文の思想は、記述的知識をいくら積み重ねても持つことはできない。スーパーの例と類似の次の例を考えてみよう。スタンフォードの図書館で、記憶喪失となったルドルフ・リンゲンス[18]が迷った。彼は、図書館で、彼自身の伝記や今迷っている図書館の詳しい説明も含め、多くの本を読んだ。しかし彼は、自分が誰なのか、自分がどこにいるか、どれほど知識を増やしても分からない。というのも彼は「この場所は本館6階の5番通路で、私はルドルフ・リンゲンスだ」と言えないからである。[19]図書館で読んだ数々の本は、彼がその中に位置している世界について様々な知識を与えてくれる。しかし如何に彼が居る世界についての知識が広がろうが、それらの知識は彼にとって何の関わりもない。記憶喪失の彼がその世界の中で自分の位置を持つようになるのは、「ここは〜だ。私は〜だ。」という指標詞を含む命題を自分自身に帰属できるようになる時である。この時彼は世界に対して一つの視座を確立する。「ここ」「私」と発話する時、発話者はそれが自分のいる場所や自分自身を指示していることを意識している。その意識と、然々であるという知識が結びついた時、彼は初めて世界の中に自己を定位することができるのである。しかし、「私」や「ここ」が指示する自分自身ないしは自分がいる場所がどのように与えられるかということは、如何なる記述によって表すこともできない。指標詞を含む命題は、このように非一指標的記述とはラディカルに異なるものであり、かつこれら無数の非一指標的記述によって表される知識の総体をその周辺部に支え持ち、その中で中心的位置を占めるものなのである。

このような指標詞のSinnはどのように考えられるべきであろうか。ここで再考せねばならないのが、先のフレーゲのF、Gの考察である。Fは、とりわけ（あれほど思想の客観性、公共性を主張した）フレーゲが、「一人自分のみが把握できる思想」という私秘的概念を持ち込んだとして、悪評高いので有名な箇所である。だが、エバンズも言うように、思想を論じる時に重要なのは、それが客観的なものであるということであるので、それは必ずしも公共的である必要はない。[20] さて、フレーゲが「私」という語のSinnを「自分自身に対する特殊な原初的振舞い」としたのは興味深いことである。おそらくフレーゲは、「私は～だ」ということができる場所に自己意識というものが開示されるということを、このような表現で表したのではないだろうか。自己意識というやっかいで曖昧な概念を、フレーゲは「振る舞い」という観点から示そうとした。これも又「自己意識」と同じ位曖昧な表現であるが、直接指示論者がフレーゲ批判の際に念頭に置いていた「記述が表すもの」としてのSinn概念とは違った方向で、フレーゲは指標詞のSinnを考えていたであろうことがわかる。Gの、同時に他人にも把握できるような意味、すなわち「この瞬間にあなたに話しかけている者」という意味での「私」は、この原初的振る舞いとして捉えられた自己意識の、もう一方の側面である。言い換えれば、世界に対して開かれたある視座を、「外側から」見た時の意味である。「私」が位置する場所が「ここ」であり、「私」が位置する時間が「今（今日）」であることから、この基本となる「私」のSinnが解明されれば、指標詞全体のSinnが自ずと解明されるであろう。この考察は、あくまで指標詞のSinnに関して一つの方向性を示すものであり、具体的な解明とは程遠い。だが、直接指示論者が考えたように、指標詞によって対象が直接与えられ、それについて諸々の性質が帰属されると考えるより、説明可能な事象の範囲が広がるであろうことは、三で考察したとおりである。

註

（1）「文脈」という重要ではあるが曖昧な概念を定義付けることは難しい問題である。ペリーも言うように、「いろいろな指示詞を詳細に研究した後にやっと答えられるもの」であろう。J. Perry, "*Frege on demonstratives*" in *Demonstratives*, ed. by P. Yourgrau, 1990, Oxford. p. 55

（2）同じ文脈依存性が議論される時に持ち出される「これ」「あれ」等の「指示詞（demonstratives）」との区別をここでつけておかねばなるまい。指標詞と指示詞はしばしば一緒に議論されることもあるが、これはダメットも指摘するように、適切な取り扱いではない。指示詞がその理解の為には身振りや手振り、眼差し等による対象指定行為が補完されねばならないのに対して、指標詞にはそのような補完は必要でない。そうすると、文脈によって同じ語が指標詞の役割をしたり指示詞の役割をしたりする語もでてくる。例えば「ここ」という語は、「私はここにいる」という文では指標詞として用いられているが、地図のある地点を指して「二週間後に私はここにいるだろう」と言う場合は指示詞として用いられる。この場合、前者を指標詞として、後者を指示詞として考えるべきであろう。

（3）だが、ここでは所謂フレーゲ解釈は行なわない。フレーゲ意味論の解釈については、諸家の議論の対象になっており、未だ解決がつかない大きな問題であるので、ここで早計な予断を下すことはできない。

（4）D. Kaplan, "Demonstratives" in *Themes From Kaplan* p. 483 ed. by J. Almog et. al., 1989, Oxford.

（5）「フレーゲ主義」はおそらくフレーゲ自身の見解ではないことに注意されたい。

（6）Sinn は最近では「意義」、Bedeutung は「意味」と訳されているが、sense という意味でも「意味」という言葉を使うことがあるので、混乱を避ける為、あえてドイツ語のまま記している。

（7）J. Perry, op. cit., p. 51

（8）Ibid., p. 60

（9）Ibid., p. 52

（10）Ibid., p. 53

(11) G.Frege, Der Gedanke ここでは藤村龍雄氏の邦訳「フレーゲ哲学論文集」(岩波書店、一九八八年)に従う。邦訳一〇九頁

(12) 以下の議論は J.Perry, op. cit. による。

(13) J.Perry, "The problem of essential indexicals", in *Propositions and Attitudes*, ed. by Nathan Salmon and Scott Soames, 1988, Oxford.

(14) 指標詞に Sinn を認めるという立場は、実を言うと、相当苦しい立場であることは断っておかねばなるまい。

(15) G.Frege, op. cit., 邦訳一〇九～一一二頁

(16) Ibid., 邦訳一〇八～一一二頁

(17) G.Evans, "Understanding Demonstratives" in *Demonstratives*, ed. by P.Yourgrau, 1990, Oxford.

(18) フレーゲの著作の中の登場人物である。

(19) J.Perry, op. cit.

(20) G.Evans, op. cit., p.89 つまり、思想の存在は、人によって把握されているか否かからは独立だということであるが、ここではこの問題には立ち入らない。

(本学大学院博士課程・西洋哲学史)